
坂本

大暮空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

坂本

【Nコード】

N97860

【作者名】

大暮空

【あらすじ】

ひよんな事からクラスメイトである坂本月に“殺人に興味がない？”という言葉聞かされた小嶺文哉は、日常に一つの変化が訪れた。学校一の完璧な先輩。食べる事に好意を抱く孤独人。死を蒐集する自殺志願者……。好奇心に身を任せる月と、借りに忠実な文哉の瞳には、日常に非日常が溶け込んだ世界が映っていた。

日常（前書き）

初投稿です。

読んだ感想等をよろしく願います。

辛口なものでも受け付ける限りです。

日常

幾分の星たちが密会するある日の夜。

俺は彼女に壊され、

彼女は俺に殺された。

1・日常変化

0
0
0

坂本月、つまりは俺の友達以上恋人未満の彼女の物語を欲するよ
うな層は、そもそもいないのだと思われるのだが。しかしどうして
いくら需要がないからつと云ってもこの物語の真相を知りたいと言
う人間は、そもそも、指の数程度しかいないだろうと言っのにも関
わらず、それでいて、その真相を知りたいという願望があるという
のもまた事実なわけである。

俺としては、それはもの凄く迷惑極まりない爆弾テロ並みの悪意

を感じるのだけれど、それでもこの事実は既に肯定されてしまっているのだ。

だからだ。

だから教えてやってもいい。

いやいや、教えてやろうじゃないかと俺は思う。それで、気が晴れると言うのなら。

願望が叶うなら、

欲を手に入れられるなら、

そのためにだったら俺はいくらでも力をかそう。

この手、

この足、

この胴体、

この臓器、

この命を賭けてでも。

でも。しかしながら、それはあくまでそれだけであって、この話は全くの例外。

この物語に関しては、俺は断固してそれを拒否するだろう。拒絶するだろう。これは、それほどまでに危険性を帯びているのだ。これもまた事実。

けれども、

俺はこの物語を語らなければならない。

語らなければいけない使命があるのだ。

いくら俺が、これに対して逃走を試みたところで、まるで、鎖によつて体を拘束されたかのように一つの楔によつて逃げることなど万に一つないに等しいわけである。

それが、彼女と交わした最後の約束なのだから。

10月10日 俺は自殺した。
いや。自殺したのではなく、自殺しようとした、だ。

自殺未遂、
自殺に最も近くて、もっとも遠い行為。
故に、俺は自殺を失敗してしまった。
学校の屋上から、ただ単純に飛び下りれば済むだけの話だったの
だけれど、それでも失敗してしまった。

俺が通うこの学校、
県でそれなりの知名度を誇る進学校。私立呈陽学園ていようがくえんの屋上には、
俺みたいな自殺志願者防止用のためのフェンスは残念ながら設けら
れていない。

今までこの学校で自殺がなかったのがどうにも不思議にしか感じ
られないのだが。しかし、今までに自殺した生徒は一人も居ないと
いうのが事実。

一人も、だ。

なら学校の敷地内では？
といった疑問も当時は抱いていたのだけれど、結果は変わらず誰
も居ない。

それも校外でもだ。
ほんと、可笑しな話である。

それなら、
それなら俺がその最初になってやろう。

初めての自殺者に俺がなってやろうではないか……とその当時そんな風に考えてしまっていた自分が、今では恥ずかしい限りである。自分は人とは違う。

そう周りに自分という存在の定義を知らしめてやりたかったのだろ。元々はそんな馬鹿げた考えを有している訳ではないのだけれど、ただ、それは唐突にそう思いついてしまっただけであって、浅はかな考えでしかなかったのだ。

「しかし」

俺は、頭から溢れ出ている赤黒い液体を前にして、屋上の堅いパネルに横たわっていた。

「まさかバナナの皮を踏むなんてな……」

呆れながら言う。

しかし、過ぎてしまった事を今さらどうこう言う気にもなれない。

小嶺史哉。

バナナによって自殺を阻止される。

「なんていうか……滑稽だ」

ほんと、恥ずかしいにも程がある。

たかがバナナの皮一枚で、ここまで熱く決心したこの俺の熱い決意をこうも容易く邪魔をしてくれるなんて。しかもバナナの皮といったもんだ。これじゃー親にも満足に顔合わせられねーや。

自然と笑みが零れてしまう。

顔が血まみれで、決して楽しそうには見えないのだけれど、それでも俺は心底笑ってみせた。

けれど、それは別に楽しさ余りに零れた笑みではなく、嫌味つたらしく、

失望の意を込めて、

そして、それらを含めてただ呆れながら 笑っていた。

なんだ、神様ってのはそんなに俺を死なせたくないのか？

「……けど、まあ」

俺は重い上体をゆっくりと起こす。冷たい風が頭に嫌に響く。

「バナナの皮はねーだろ、普通」

言っと、何とか立ちあがった俺は血を流し過ぎたせいなのか足もとがふらつく。

気のせいかな？

なんだか目がかすんで見えるのだが。それに、膝が踊っているようにも感じる。

「ってあれ、なんか…これ、死亡フラグじゃね……………」

「

小嶺史哉 再度床に倒れた。

それは同時に、意識がそこで途絶えた事を意味していた。

『僕には超能力があるんだ』

これは俺がまだ幼少時代のちょっとした一文である。

自分作文。

これは国語の時間に行われた授業の一環の一つなのだが、正直、よくもまあこんな先生のことをお母さんと言いついてしまった時のような恥ずかしい事を平然と言えたものだとな、今では良き思い出、変えられない？歴史な訳なのだが。しかし、だからと言って後

悔していない訳では当然のことながらそれは全く違う。

もし、未来から来たネコ型ロボットが居たとしたのなら、是非ともタイムマシンを使わせてもらいたい。

机の引き出しの中に広がる四次元の世界に勢いよく飛び込みたい。そんなでもって、ついでに頭が良くなる薬を貰いたい。正直なところ、これが本音な訳なのだがあくまでついだ。そこは黙って目を瞑ってもらいたい。

未来から来たロボットなのだから、その不思議な不思議なまっ白なポケットの中からそういった道具が出てきても、なんら可笑しくはないだろう。

まあ、未来から来たっていう時点で既に可笑しくはあるのだが。それに、もともと俺の部屋には机なんてものは存在しない。

アニメの見過ぎか？

いや、日本を代表する子供から大人まで幅広く親しく愛されてきた長編アニメなのだから、この場合俺はまともな思考の持ち主なのだろう。

アニメ万歳。

そしてありがとう、ネコ型ロボット。

しかし、まあ、

そんな夢のようなことはある訳でもなく、あの当時の俺は本当に自分には人とは違う、人にはない摩訶不思議な力があるのだと現実信じていた痛い少年だったわけだ。手のひらを中空の翳せば、そこから火の粉が出現するのだと本気で思っていたのだ。

実際問題。

もしも、それが本当に起こり得る事だったとしても、現実的に考えてみればそれは社会の注目の的になっていただろう。

マスコミやパパラッチに追われる毎日。

悪く言えばそれ事態も情報操作され、俺は何らかの実験対象とされていたのかもしれないと 考えるだけで嫌気がさす。

これが普通の考えだ。

素晴らしいぐらいに、な。

けれど、俺はそこまで出来た人間ではない。

出来た　とは変な言い方なのだが、普通と言ったほうがこの場合は適切なのだろう。

あの当時は、もしも欲にまみれの薄汚い大人たちに捕まって何やら危ない実験にモルモットとして扱われたと仮定しても、その時にはそこに居る研究員全員を殺してでも抜け出してやる　一見、危なっかしいように聞こえてしまうかもしれないが、いや、実際危ないのだけれど、もしもそんな事態に陥ってしまったとしたら、人は普通どういった事を思い浮かべ考えるのだろうか。

ようはそういう事だ。

ただ、俺の場合はそうだっただけで。

個々人の思考なんて、それこそ分からないというものだ。
だから言わせてもらう。

「　ここは何所？」

……

俺はベッドに横たわっていた。

白をベースにされた天井、消毒液の匂いが立ちこむ独特な匂い。そして、仕切りによって隔離されたベッド。

自分からしてここはとて、とは、いささか言い過ぎではあるが、しかし別にそう俺が思ったとしても世の中が一気に一転する訳ではない。当たり前な話だ。

おかしい話、国々の首相もとい大統領もとい国を統べる人間の一言で世界が変わると言う張る人間と、それに反対の意見を言い張る

人間の差というものは、一体どこがどう違ふのだろうか。

正直なところ、それには俺は何も言えない。

そんなもの、誰にも分からないからだ。

正義を仮定にして例えるなら。

己の正義を真つ向から受け止め、信じ、認める為に世界を敵にまわす人間や、正義という言葉を使って人々を惑わす人間や、世界を崇拜して、おのれ自身を犠牲にする人間など、正義という言葉の形は人それぞれ、個々人によって変わっていくもんだと、俺はそう兄から教えてもらった。

俺も、それには「もつともだ」と頷くだけだったが、それ事態も実際のところは間違いないかもしれないなんて、今では思っている。戦争を起こす。

そう心に決めたある国の首相も、己が持つ信念、正義に基づいての選択だったのかもしれない。

そう考えてみると、世の中、かもしれないだらけな世界なのだと錯覚を起こす人間も少なからずは出てくるだろう。

現に、俺がそうだから……。

「ふわふわして気持ちいい」

話がよからぬ方向に百八十度逸れてしまったが、ここでもう百八十度戻すしよう。

ふわふわした布団が、思いの外俺の心を集中的に揺すってくるこのベッドは、ここ最近に新しく学校が仕入れたものだ。よって、まだ新品とどのような匂いが鼻を突く。

うん、保健室だ。

どうやら俺は、保健室のベッドに横たわっているらしい。

どうして俺がこんなところに居るのは何とも言えないのだが、しかし、さっきから頭がジンジンする。

つか、痛い！

割れそうなくらいに痛い、痛すぎる。

咄嗟に手を頭にまわす。指先が頭に触れた瞬間、手触りからして包帯だろうか。

それは俺の頭に何重にも巻かれていた。

一体誰がしてくれたのかは残念ながらそれは分からない事だが。

多分、その心やさしき御人が俺を此処まで運んでくれて、拳句の果てに大急処置までやってくれただけでも嬉しい限りだ。

救急車を呼んでくれれば一番良かったのだが。

うん。

そこは黙って目を瞑るとしよう。

「大丈夫？」

痛みにある程度慣れたと自分に言い聞かせていた俺の耳元でぶつきらばうに話しかけてくる声が聞こえてきた。

「……月か」

濃い赤色をした髪は腰辺りまで綺麗に伸ばされており、右耳にシンプルなシルバーアクセのピアスが顔を覗かしている。

目まで隠れるまでに伸ばされた前髪の隙間から大きな黒い瞳が窺える。

俺が所在するクラスの出席番号12番。

一回も会話と呼べるものを交わした事が無い坂本月の姿かたちがそこにはあった。

「最初は驚いたわよ。だって、屋上でアナタが倒れているもの」

後ろ髪を気だるそうにかき上げ、後ろの方でひと束に結ぶ月。

ピンク色の可愛らしいシュシュだ。

「あー、……うん。そうあれだ。バナナの皮をついっかかり見事に踏んづけてしまったな。気づいたらここに寝ていたんだ。ここまで運んでくれたのはお前だろ？ありがとう」

「別に、運んだというか、襟を持って引きずってきたんだけど……、アナタがそう言ってくれるなら、謝らなくても済むわね」

「いや、謝れよ」

引きずってきただってどういうことだよ。

何だ、あれか？

重いから引きずることしか出来なかったの　とか言うんじゃないだろうな。

確かに、お前の体格からすれば俺の頭一つ分低いかな？

自分より体積のある人間を運ぶのは難だと思う。

しかも女なら尚更だ。

だがな、

それでも他に方法とかあるだろ。

だからか？

両ひじの制服が綺麗に擦り破けているのは。

血出てるよ。

ベッドが赤く染まってるよ。

「いやよ、面倒くさい」

「さっきの言葉は嘘だったのか！」

つきまして、

俺は自分のベッドに仰向けになっていた。

あれから、俺と坂本は少しの時間軽い世間話を展開させていた。

しかし、それでも限りある時間を満たすことが出来ず、そのまま

俺たちは学校を後にした。

駐輪所から自転車を持ってきた俺は「送ってやるよ」とやさしく営業スマイルを月に向けたのだが「大丈夫、私の家はここからそう遠くじゃないから。いいよ別に、その優しさだけでも有り難く貰ってあげるよ」と、全面的に拒否されてしまった。

俺はしぶしぶ「分かった」とだけ言うと、そのまま月と別れた。そして今に至る。

「……痛い」

やはりというか、今日そこらじや傷の痛みが癒える訳でもなく、今は安静にして寝返りをうつ俺。

取りあえず今日は何もせず黙って寝よう。

痛みに夜中何回も起こされそうな不安が脳裏を過ったが、それはしかたがない。

ここは黙って寝るに限るってもんだ。

うん、それが得策だ。

「まあそういうことだから　　と」

カチッと、リモコンを使い証明を消した俺は毛布を肩の上まではおった。

「……………」

まあ、そんなに上手く事が進む訳がないのが小嶺クオリティーの真骨頂。

俺は口だけを動かした。

「……なんだよ、舞」

俺が寝ているベッドの反対側にあるこの部屋唯一の出入り口のドアから感じる視線。

「用が無いんだったらさっさとそこ閉める。冷気が俺の体を蝕む」

「っ、何よ！せっかく心配してやったっていうのに！」

言っと、俺の妹、小嶺舞が部屋に入ってきた。

「うるさい、只今ガラスのように繊細でデリケートな俺の頭が危うく砕け散りそうだったぞ」

綺麗にな。

「何で私のせいなのよっ、理不尽じゃない！だいたい、もとはお兄ちゃんのみめけな生活が原因でしょ！」

「キレるなキレるなマジでキレるな。分かったから、十二分に分かったから怒鳴るのを止めてくれ」

本当に砕けそうだ。

「つたく、もう。……それで、大丈夫なの？」

「ああ、ざつと一カ月程度で治るってさ」

「それって地味に大事じゃない？本当は何て言ってたの、病院の先生」

「一週間と三日だそうだ」

「ふーん。よかったじゃない、大した知識も詰まってる頭が無い事で」

部屋の照明をつけないまま、廊下の明かりで微かに部屋の中が見える視界の中、舞はガラステーブルの上に腰を下ろした。

「そのまま植物人間にでもなればよかったのに」

見ての通りツンツンしている妹だ。

「悪かったな、お前にこんな元気で不快感が絶好調の俺の姿をさらけ出してしまってる」

「さらけだすぐらいだったら、服でも全部脱げばいいじゃない。

ま、脱いだら殴るけど。……モーニングスターで」

妹よ、そこはせめて知名度のあるもので殴れ。その選択は明らかに失敗だ。それとお前はそんな鈍器持っていないだろうが。

「モーニングスターとは手厳しいな。……ま、ありがとよ」

心配してくれて　　は、あえて言わないのが、妹に対する俺からの礼儀だ。

「ちよっ、何よ、いきなり改まって！気持ち悪い！」

「はいはい、どうせ私は気持ち悪いですよーだ。だから早くお前も寝ろ。明日起きれなくなるぞ、主に俺が」

「最後のはよけいよ！」と言うと、舞はドアノブに手をかける。

「……………心配したんだから」

微かに聞こえた言葉と同時にドアが閉まる。

最後にデレをみせてくれる良き妹、舞。

テンプレ過ぎだと思うが、それが我が妹である存在の証しだ。

「……………ツンデレはやっぱりテンプレに限るな」

しかし、ツンとデレの比率は八対二ぐらいだが、まあ気にしない

で
お
こ
う。

「
寝
る
か
」

俺は再度瞼を閉じた。

始まり

001

11月5日。

そろそろこたつが恋しくなる冬到来の曖昧な時期。

今日にもこたつを出さなければ危ないそんな夜、事前の連絡もなく月がやってきた。

「こんばんは。今日はやけに冷えるわね、小嶺君」

突然の訪問者であるクラスメイトが、別に聞きたくもない言葉を並べて玄関の前に立っていた。

「んなもん分かってるっつーの」

「あら、えらく酷い事を言うのね。あなたは私に恨みでもあるのかしら」

と肩を震わせ、私は今とても寒いので、だから早く家の中に入れてとも言いたげに手を摩てくる。

こいつは俺に何を求めているのだろうか。

当然そんな事分かるはずでもなく、すんなりと彼女を家の中に入れてやる俺はあまい男に違いない。

はあと自然に溜息をついていた。

月は、靴を脱ぐなりズカズカと廊下の突き当たりにある階段を上がると、上ったすぐに設けられたドアを開け中に入って行った。

俺の部屋である。

部屋の中心に置かれた丸いガラステーブルの横に腰を下ろすと、「何をしているの？アナタも座りなさい」と、ドアの前で立ち尽く

していた俺に命令形の言葉を吐いてくる。

「ここはお前の家か」と呟きながらも、ドアを閉め命令に忠実に従う。

今の画を説明すると、俺と月は面と面、顔と顔を向かい合わせながらガラステーブルを挟んで座っている。

「で、今日は何しに来たんだ？」

「喋り出すなり下ネタを言うあなたに、私は憐みの眼差しを送るわ」

「その発想に至った事に、俺は嫌悪の眼差しを送るよ」

「何を言っているの。あなたは馬鹿なの？」

取りあえずシカトを試してみた。このままいけば無駄に長く続きそうだと悟ったからだ。主に会話が。

しかし、俺の配慮も空しく目の前の少女は喋る事を止めてはくれなかった。

しょうが無く付き合ってやろうと、諦めながらも月の無意味な言葉遊びに相槌を送る。

坂本月十七歳。

俺が通う私立呈陽学園のクラスメイトである女子生徒。

俺は彼女から命を救われた。学校の屋上で頭から血を流していた俺を最低限の応急処置を施してくれた、猫を被ったツンドラな絶対女子高生。今だから言える事だが、俺は彼女から命を救われた事に少なからずの後悔を抱いていた。

理由は言わずと知れた、絶対的な強者の彼女に原因がある。

彼女、坂本月は、学校では物静かで地味な印象が強い優等生の位置付けをされている。しかし、実際にこうして会話を展開させてみれば、その誤った認識が嫌に露わにされていくのが驚愕だ。

人を物と置き換えた発言や、唐突的に物を投げつけてくるなど。色々と性格面を見直してもらい点が幾つも上げられる。

それが彼女の真の本性。

善良で固められた表とは対照的な裏の顔。

偽善という言葉がよく似合う俺の数少ない友人の一人だ。

十五分程経過した頃、会話に終止符が唐突に打ち込まれた。

「殺人に興味はない？」

何時もの理解しがたい言葉とは全然違うそれは、何の脈絡もない言葉だった。

「……別に」と合わせてはみたものの特に会話が終わる訳でもなく、月はピンク色の唇を動かす。今日はグロスを塗ってきたのだらうか。

「私は興味があるの。殺人者がどうやって人間を殺すのか。どんな気持ちで人間を殺そうと考えたのか。不思議に思わない？メディアでは犯人のその時の心情を文字として記載しているけど、殺人者本人の心情は全くとして違うものかもしれないし、あまり差異がないのかもしれない。だってそれは殺人を犯したその人本人にしか分からない事なもの」

そこで一時言葉を止める。

一気に話した事で酸欠でも起こしたのか、息を荒げる。少し色っぽい吐息が耳に入るのを感じた。

「まあ、確かに。言われてみればそうなのかな？」

「そう。全くその通りよ。だからね、小嶺君。私は殺人に興味があるの」

ほほ笑みながら言う月。

それを見てどんな表情を浮かべれば良いのか一人悩む俺。

妙に気まずい雰囲気がこの部屋を占めていた。

「そういう事だから小嶺君。あなたもこの題材に興味を持ちなさい。と言うよりも趣味として扱いなさい。私はこの題材をあなたにリスペクトするわ」

「魅力的じゃない」と、俺の向け人差し指を突き指してくる。人様に指を指してはいけないと、こいつは幼少時に親から教わらなかったのか。

「……でもよ」

ここで俺は、月が言った言葉の綻びについて問い詰める事にした。
「もし仮に俺がその意見に同意して、殺人に対して趣味の中の一つに取り入れたとしよう。けれど、その後はどうするんだ？」

もつともな意見を言ってみせた俺は、テーブルに置いていた缶ジュースを手取る。

「そんな事、決まってるじゃない」

残り少なかった中身を飲み干し、テーブルの上に置いて俺はもう一度口を開いた。

「殺人でも起こすつもりなのか？それなら俺はご免だぜ。この年で務所には厄介にはなりたくない」

「何を早とちりしているの？あなたは本当に馬鹿なのね。いい、私が考えたプランをこの瞬間この時間この空間で、今から小嶺文哉という男に説明するわ」

言うど、その場に立ちあがり垂れ下がった髪を一結びに仕上げる。やっぱりこいつは、俺がポニーテール萌えだと分かっているの行動なのだろうか。

「殺人はしないし殺人に近いものもしない。務所に厄介になるのは私も嫌なもの。だったら、手段は一つ。選択は一つしかないのよ」

テーブルに片膝を乗せ俺の顔数センチの所まで顔を近づける。ほんのりとシャンプーの匂いが自然と鼻をくすぶる。

殺人に近いものが何なのかふと疑問に思ったが、あえて月に質問をする感情を無理に押し殺し、俺は彼女の次の言葉を待つ事にした。

「殺人をしなければいいのよ」

「……………え？」

間抜けな声が無意識に外に出てしまった。

というよりも、はて、さっきのは俺の聞き間違いなのだろうか。

「殺人をしなければいいのよ」

大事なことなので二回言ってみたらしい。

そして、さっきのはどうやら聞き間違いじゃなかったようだ。
不思議だ。

自信満々に言ったに違いないのに、どうしても違和感しかみつからない。

「何コイツ、頭可笑しいんじゃないって思っている顔をしているわね。だからあなたはゴミなのよ。いい？最後まで聞きなさい」
呆れた表情を露骨に浮かべ、真っ黒な瞳を細めて口を開く。

馬鹿からゴミに降格していた事には触れないでおこうかと思う。
また話がややこしくなるに違いないからだ。

「殺人はしない。ならどうするか、という壁に道を遮られるのが関の山なのだけれど、考えてもみなさい。殺人が出来ないのなら他の誰かにそれを行ってもらえば話がすむのよ。ね、簡単な事でしょ」
窓を閉めているので風がふいている訳がないのにも関わらず、彼女のスカートは揺らいた。そもそも、そんなに寒いのなら何故スカートを穿いてきたのが理解できない。これが女性だからなのかは分からないし、俺が男だからかも分からない。男と女の服に対する感性の違いが嫌に分かる光景だった。

しかし、

俺はすぐ目の前にある彼女の顔を直視できず、無意識に俯きながら自分の両手に目を向ける。右手の親指の第二関節がつつすらと切れている事に気がついた。

「話を聞いているの小嶺君」

何時まで経っても返事が返ってこなかったので、月は半分苛立ちを含めて聞いてくる。

「聞いてたよ。つまりお前は、自分が犯罪者になりたくないからそれを他人に押し付ける、って事だろ？」

「平たく言えばそういう事になるわね」

「別に平たくは言っていないだろ。……まあいいか。んで、そんな都合のいい人間がこの町に居るのか？そしてそんな奴をお前は知っているのか？」

当てがあるのかと後に続ける。

多分ないだろうと俺は思っていたのだけれど、それはあくまで俺自身の浅はかな考えであって、実際問題、それはそうでしかなかった。

「当てならあるわよ」

思いがけない言葉が返事として返される。

「呈陽学園高等部三年、尚江皓^{なおいひかる}十八歳女子。この人よ」

俺は俯かせていた顔をゆっくりと上げて、月の顔を凝視した。

尚江皓　俺は彼女を知っていた。

それも当然の事だろう。

何しろ彼女は学校一のマドンナの位置づけを受けているからだ。成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群、性格は申し分ない。

そんな彼女に好意を抱かせる生徒は俺の知る限りでは数知れず。

正直信じられないが、彼女は誰がどう見ようと完璧な人間だった。しかし、俺からみれば、彼女は生きているだけで死にそうな、そんな見ているこっちが肝が冷えてしまう程にちっぽけで小さな存在だと俺は初見でそう思った。

完璧な人間。

出来過ぎた人間。

周りの人は彼女の事をそう言い称えるのだけれど、果たしてそれは本当に彼女に向けてよいのだろうか。

確かに、彼女はその言葉が似合う。完璧という定義が十分に最適な人材なのだと俺も思う、思うのだけれど、そうなのだけれど。俺には何かを我慢している。何かを抑制しているとは見えなかった。しかし、と俺はそこで思考を区切る。

「何で彼女がそれに関わっているんだ」

心の声が音声として口から出ていた。それだけ、俺は驚いていたのだろう。

「何でと言われても、尚江女子がそうであるからの何者でもない

からよ」

月は近づけた顔を離し、テーブルから下りた。そしてそのまま衣服の乱れを直すと、ドアの方へ足を歩かせる。

ドアノブに手をかけ、ガチャリと開けると一言「今日はもう帰るわ」と、別れの言葉を言つてドアを閉めて行つた。謎を残した状態で。

……

十秒ほど経つてから玄関が開く音が微かに耳に入り、本当に帰つたのだと安堵に酔いしれる。

その場に立ちあがり部屋の端にある本棚に行くと、綺麗な階段状に並べられた本の中から一冊を手取る。以前から読んでいるサイコホラー小説だ。妹である舞から薦められて読んでみたのだが、元々自分はホラー小説を苦手の類に入れている。しかし、思っていたものよりも興味をそそる点が幾つもあり、俺はすすんでこの小説を読む行動が、今の日常になりつつあった。

小説を取り出してベッドに足を歩かせると、ふと足元に白い紙きれが落ちていた事に気がついた。

そこは、ついさっきまで月が座っていた処だったので、これは月の落し物なのだと推測する。

拾い上げ、どうやらこれはメモ帳を破つたものらしい。そして、それには一言、大きな赤い文字で何かが書かれていた。

「呈陽学園部ブログ……？」

書かれている文字を声に出してみる。他にも何か書かれていないのかとひっくり返してはみたが、裏には何も書かれておらず、ただ

の白紙であつた。

赤字で書かれたこれを、俺は少し不気味に感じた。感じたのだけれど、俺はすぐに感情を押し殺す。不気味と感じたところで、それは間接的に月を侮辱する事と同等だからだ。

俺は、この文字の意味を追求しようとはせず、そのままベッドに飛び込んだ。

仰向けになつて、目の前に小説を開き、昨日読んだところから読み始める。

日常を現在進行形で展開させた。

当初の目的であつたこたつの準備をする事を忘れ、俺は真剣に規則的に並べられた文字をなぞるように目を動かす。

室内の温度は徐々に低くなつていく。

そろそろ舞が部屋に顔を覗かせる時間が刻一刻と迫っていた事に気付く事もなく、自分の世界に身を置く小嶺文哉十七歳。

今の時間は、ちょうど八時を過ぎた頃だつた。

002

次の日、俺は朝早くから月に呼び出しを受けていた。

朝目が覚めて、枕もとに置いてあつた携帯が青い発光を点滅させていたので、脳が完全に目覚めていないなかに携帯を開いた。ディスプレイにはメールのアイコンが一件。誰からかと開いてみるとそこで後悔した。

メール一件

宛 『奴は坂本月』

題 『見たら開きなさい』

本文 『学校に着き次第屋上に来なさい。』

何ともシンプルな本文だなと溜息をつく。そして伝えたい事をこれでもかと強く主張している本文を、俺は見るのが初めてだった。それにしても「見たら開きなさい」とはどんな題名だよ。これも始めてみるものだった。

理由が理由だが、俺はしぶしぶ従う形で学校に行く準備をした。偶然だろうか、今日は何時もよりも早い時間に起きてしまった事に少しばかりの怒りを感じただけで、すぐにそれは脱力感に変わっていた。

家を出て、明らかに登校時には味わえない冷気を体全体に浴びながらも目的地である学校に足を歩かせる。きつと、俺の前世はどこか名家の家来だったのだろう。皮肉に俺はそう思った。

そして今に至る。

教室に着くなりそこには月の姿は無く、しょうがなく冷え切った携帯でメールを打つと返事は早く返された。

題 『ゴミ(笑)』

本文 『って言葉は、あなたみたいな人間の事を表しているのね。凄い発見だわ。私は屋上に居るから早く来なさい。』

題名と本文が繋がっているメールは大変珍しいのではないのかと溜息をつく。これで二回目の溜息をついてしまった。ペースが速いように感じる。

クソ！

本気で思ってしまった俺は、果たして短気なのだろうか。っというよりも、これは当たり前前の反応だと自分にフォローを送る。

「……惨めだ」

しかし、フォローだけではどうしようも出来なかった。

「月の奴、覚えてろよ」

そう言くと、足を屋上に向け走らせた。勿論、メールの内容に従った訳ではなく、あくまで彼女、坂本月に文句を言いに行く為にだ。せつかくだから日ごろの棘がある暴言の数々の分も言っただけで強く心に思い、階段を勢いよく駆け上がった。

バン！

最上階の階段を登りきり、突き当たりにある両開きのドアを荒く押し開けた。

瞬間、冷たい突風が俺を襲った。

襲って、同時に野球ボールが顔面にめがけて飛んできていた事に、気づくことができなかった。

ゴツツと音とともに後ろに倒れる俺。いきなりの事で頭が混乱しているそんな俺に追い打ちをかけるように後頭部を冷たい床に強くぶつける。

痛みが顔の前後から襲った。

「……何をしているの、小嶺君」

顔を両手で押さえ悶える形を強いられた俺に、ドアの方から声がかけられる。

月だ。

「あなたの行動一つ一つにとにかくは言わないけれど、私はあな

たに助言を送ろうと思うわ。

馬鹿なことは止めて、早く自分が埋まる上に建てられるであろう墓石の準備をしたらいいんじゃない？」

会って初めに言う言葉ではないだろうが。

俺は上体だけを起こして月の顔を捉える。

「……見てみるよ。これ、鼻血なんだぜ」

皮肉に俺はそう言った。それしか今は出来なかったからだ。

月はクスツと一瞬だけ口を釣り上げると、手を差し伸べる。俺は無言で彼女の手を掴みあげ立ちあがる。

「大丈夫、小嶺君。鼻から血が出ているみたいけど、痛くない？」

「不思議だな。気遣ってもらっているのに、何だか腹が立つよ」

「それは少しばかりの気の迷いよ」と当の本人は平然と言う。俺は足もとに転がっていた野球ボールを拾い上げると月に手渡した。

「これ、お前のだろ」

「あら奇怪。何でさっきまで握りしめていた私のボールがこんなところに落ちているのかしら？」

「それはだな月。お前が俺めがけてそれを投げ入れたからだよ」

「そうなの。不思議な事もあるのねえ」

「何他人行儀な発言してるんだよ」

「あら？私とアナタは他人でしょ？それにアナタは誰なの？間接に一文字で答えて頂戴」

到底答えられないような発言をするこいつには良心と呼べるものがあるのだろうか。俺は「んで、昨日といい、今日は一体何のようだ？」と話を変える。

「質問の意味をお分かり？アナタはカスなの？」

しかしそれは出来なかった。そしてまた振り出しに戻ってしまった事に脱力感が一斉攻撃を仕掛けてきた。

「……我」

取りあえずそう答えてみるが、特に意味は無い。

「今日はあなたに確認してほしい事が一件あるの」

ものの見事にスル をされてしまった。脱力感が一気に増す。もう何だか話すのもダルイと逃げを考えてみたのだが、俺にはそんな事は許されないようだ。

月は次の言葉を言う。

「尚江皓女子に会いに行くのよ」

無表情で言うので、こいつが今から尚江皓を締めに行くぞと錯覚が起きてしまった。

まあそのままの意味だろうと再確認をしようと思う。

「会いに行くって。急すぎるんじゃないか？」

「急も何も、事は早く起こさないと手遅れになるわよ」

別にそんな事はなんじゃないかと思う。それに、手遅れになるのはお前の頭なんじゃないかと上げ足を取る。ま、既に手遅れだと思うがな。

月は俺の横を通り過ぎて階段を下りて行く。「どこに行くんだよ」といちょう確認を試みるが返事は……ま、言わないでいいか。

「会いに行くのよ」

そう言っただけで止めた足を再度指示を送る。俺は無言で月の後を追う形になっていた。

朝早く、誰も居ない教室の端の席に尚江皓は居る。
理由は分からない。

ただ彼女が単に早起きなのは聞いたことが無い。、そこにはちゃんとした理由があるのかもしれないし、無いのかもしれない。

彼女は何時も本を読んでいる。

学校側が用意した本とは違い、TUTAYAで仕入れた小説を、
だ。

TUTAYA特有の茶色いブックカバーをはめた小説を、静かに、
ゆつくりと。

なので、彼女が何を読んでいるのかは謎だ。

その印象に合った難しい文字が規則正しく並べられた本でもあれば、そぐわないライトノベルを読んでいるのかもしれない。

ただ分かるのは一つ、彼女は文字を読む事が好きだという事だけ
だった。

それ以外の詳細は誰も知らない。

彼女の好物や、趣味や人との間柄など。

面白いぐらいにそれらは深い密林の先に隠されているのだ。

そして今日も彼女はそこに居た。

窓わきの一番後ろの席に、初めからそこに居たかのように悠然と

彼女は座っていた。

彼女の手には本が握られていた。

茶色いブックカバーをした本を。

彼女が本を持つと凄く画になると思った。

思っ、同時に彼女の存在が不気味だと感じていた自分が、そこには居た。

「御話がしたい？」

今、俺と月は西校舎三階にある三年三組の教室に居た。

「はい。尚江先輩に一つお聞きしたい事がありました」

月が尚江皓と会話を開始しようとしている中、俺は横で二人を観察していた。

学校指定の紺のブレザーを上手い具合に着崩している月とは対照的に、御手本としか思えない完璧な着こなしをしている尚江皓。

俺は、二人が全面的に正対な人間なのだと思った。

しかし、説明出来ない違和感も同時に思ってしまった。

そう、腹の内側にあるシコリの様な、そんな小さな違和感を。

尚江皓は途中であつた本に栞を挟み閉じると、机の中に入れて月の方へ顔を向ける。

「いいよ。後輩がわざわざこんな朝早くに登校してまで私に質問をしたいと言うんですもの。断れるはずがないわ」

フツとほほ笑みながら彼女は「それで、聞きたいことはなにか

しら？出来る限りお答えするわ」と、優しく言う。

「ありがとうございます」

言っと、月は彼女の優しさに甘える事にしたらしい。というよりも初めから質問するつもりだったのだろうと、俺は尚江女子に、月に代わって謝罪の意を込めた眼差しを送る。それに気付いたのか、彼女はチラッとこつちに目を向けるとまたほほ笑みを浮かべる。

ちよつとドキツとしてしまった自分に、俺は何も言えなかった。

それよりも、隣から嫌なプレッシャーを感じるのだが、これは気のせいなのだろう。

「それで、話とは一体何なのかしら」

「はい、先輩の交流関係です」

「交流関係と言えば、友達関係の事かしら？」

「はい」

礼儀正しく答える月。学校で振る舞う何時もの坂本月だ。

見た目こそ不真面目のそれとしか言いようのないものなのだが、それに比例するように彼女の口調は物静かなものだった。

猫を被っているそんな月の姿は、とても自然に感じる。慣れとはこつも視野が広がるものかと関心を抱く。

「私の交友関係に何か疑問でもあるのかしら？」

「その事なんです、先輩は友達と呼べる人間は一体何人ぐらいの数を把握しているんでしょうか？教えてもらえないですか？」

不思議な事を聞くわねといった顔をして、尚江皓は「そうね……」と悩む仕草をする。

一時の間、とは言い過ぎだが、彼女は月の意味不明な質問に優しく答えた。

「沢山……かな。数えられない程、私は人間との関わりを持っていると思うわ」

凜とした花のように、相手に不快な思いを抱かせないように彼女はそう答える。

俺はそこで改めて尚江皓が出来すぎた人間なのだと再認識をした。

どうやら俺が抱いていた彼女の印象は、謝った認識だったのだと改めて反省した。

「そうですか。では次の質問です。先輩はそこに親友と思える存在は何人居ますか？」

「一人よ」

さつきとは違い、今回の返答は早いものだった。

彼女は言葉を続けた。

「親友とは……つまり心を許せる、本当の自分を真つ向から受け止めてくれる存在なのだと私はそう思っているの。嘘は勿論の事。裏切りやその他の感情が一切として関与しない。そんな存在を、私は親友と呼ぶわ。だからね、親友は世の中に一人だけで十分。たった一つの存在で、事足りるのよ」

と、そこで言葉は終了した。

正直に言つて、俺は彼女の言葉の意味が全くとして理解できていなかった。ただ俺の頭がそれに追いついていないのか、それとも一生理解できないものなのか。俺は理解に苦しんでいた。けれど月は違った。

「そうですか。大変勉強になります」

尚江皓の言葉を理解していたのかは定かではないが、月は平然とした素振りでお礼の言葉を述べる。

月の今の心境は多分、嬉しさ反面やっぱりだった、と思っているに違いない。

彼女の思っている事が、俺の視点から見ても嫌に分かってしまう。月は微かに笑みを浮かべていたのだ。

何かを確信したような、探し物が唐突に見つかったかのように。今の質問で、それなりのものを確かに掴んだのだろう。

「今さつき先輩が教えてくれた親友の名前は何ですか？出来れば名字も教えて頂けると嬉しい限りです」

「折原伊織^{おりはらいおり}。隣のクラスである三年二組の同学年女子生徒よ」

質問に一言付け加え、尚江皓はさぞ嬉しそうな口調で答えてくれ

た。それほど、親友と称するその同学年である折原伊織という女子生徒の事が大切なのだと、自然と思えてしまう。

彼女にしてみれば、親友に関する事なら半日経っても動かす口を止めはしないだろうと、俺は不思議とそう思ってしまった。

尚江皓という人間の存在が、話してはいないのだが、直にこうして対峙してみると噂通りの人間とは微妙に違う。友達思いの普通な女子高生としか見えなかった。

今でも幸せそうな笑みを崩さない尚江皓に対し、月も同じように笑みを浮かべる。

こうして見れば彼女は普通に美少女の類に入ると思うのだけれど、これが単なる猫を被っている事を知っている俺には、ただ苛立ちの他でもない負の感情しか湧き上がらなかった。

今の時間は八時を丁度過ぎた頃。

そろそろ他の生徒がこの学校に到着をし始める時間帯だと考えている俺の横で、月も同じ考えをしているのだろう。

「...では、これで最後の質問です」と、規則違反である派手なピンク色の腕時計を確認して、月は目の前の机に両手をつける。彼女の目には、目の直ぐ先に座っている尚江皓しか映っていない。

この時、文哉は月の言葉の意味が理解できなかった。

それも当然、だってそれは彼が予想していたものとは違っていたからだ。

別に、質問の意味は理解できたのだけれど、何故今その質問をしたのかが分からなかったのだ。

そして、その質問に対して尚江皓の顔が不思議な程に歪んだ事に、文哉は違和感を覚えてしまった。

尚江皓というラベルが剥がれた瞬間。

完璧が、完全が否定された事実。

月はゆっくりと口を開く。

はつきりと、間違えないように　月は言った。

「その、親友と呼ぶ彼女は　今何処に居るのでしょうか」

緊迫した空気が不気味に漂う。

今現在、俺はそんな空間に身を置いている。

俺を含めた三人しか居ない教室は、可笑しな程に静まり返っていた。

：

太陽の日差しが気持ちいいぐらいに窓から差し込む席に俺は腰を下ろしていた。

教卓に一番近い窓際の席。

勿論俺の席だ。

今の時期にとっても助かる席なのだけれど、夏になると嫌がらせの他でもない攻撃を仕掛けてくる憎まれ役の可哀相な席。

そんな席に俺はここ一年と半年近くまでめげずに居座り続けている。

何しろ此処が俺指定の席だからだ。

当初は席替えを担当に強く要求していたのだけれど、何回ものアプローチも無駄に終わり、今でもこの席に毎日座っている。

担任曰く『他の人も同じなんだから、お前だけ特別扱いは出来ない

い』らしい。

その意見には俺も納得するしかなかったのだが、それでも諦めきれない自分が居た。

『それなら窓側の席の人と廊下側の人を入れ替えてみてはどうですか？それなら俺だけが特別ななんて誰も思わないでしょう？』と反撃を試みたは良かったものの、返事は『駄目だ』の一点張り。

自然と俺が手を引く形になっていた。

しかし、俺は今でも諦めていた訳ではなかった。

反撃の機会をただ静かに待っていたのだ。

そして今現在、俺はその機会を得ていた。

俺の横に設置された窓ガラスが綺麗に無くなっていたのだ。

それがクラスメイトである坂本月による犯行だとは容易に分かった。だって机の中に置いていた国語用の大学ノートの表紙に、でかでかと黒色のマジックペンで『自然の猛威をそこで味わいなさい』と書かれていたからだ。

普段だったら怒りしか思いつかないのだが、今日に限っては良くやったとお礼の言葉を送りたいぐらいだった。

体を反転させて、直ぐ後ろで黒板に書かれた文字を淡々とルーズリーフに書き写している確信犯に親指を立てて「グッジョブ」と言っ

てやった。
しかし、そんな俺の行動に何も言わず動かす鉛筆を止めないクラスメイトを。無視をきめてくる彼女に俺は何も言わず「ありがとうな」とだけ言っ

て再度前へ振り向いた。
今回だけは見逃してやろうと心の中だけで月の失礼極まりない行動を許して

やった。

さて、俺は右手を天井に向け力強く上げた。

全くの歪みさえない綺麗なフォームのそれを。

そして一言「先生」と言った。

「であるからにして……って、ん？どうした小嶺」

その言葉に二年一組の担任兼国語教員である三原健治みはらけんじ三十九歳未婚の厳つい顔立ちをした男性が、手にした学校から配布された教科書から目をはなす。

「はい。俺の隣にある筈の窓ガラスが綺麗に無くなっているんです」

俺は自信満々に答える。

「そうか。それはだな小嶺、窓ガラスが家出をしているんだろう。だから早く教科書を机の上に広げろ」

と言うと、また教科書に視線を戻す。

俺は諦めなかった。

「そうなんですか。そりゃー窓ガラスも家出もしたくなりますよね。だってこんなに寒いんだ。窓ガラスは最良の選択を選んだんですね」

「だろうな。私だってこの寒い中、冷気に身をさらけ出したくもないからな。だから早く教科書を広げろ」

「先生。そんな事はどうでもいいんです。俺が言いたい事はそんな窓ガラスの心情を聞きたい訳じゃ決して違うんです」

俺は手を上げた状態を崩す事無く言う。

「これでは俺が風邪を引いてしまう可能性が高くなっていきます。だから俺を後ろの席に移してください」

「駄目だ。お前の考えている事など、当の昔に知っている」

けれど、彼は俺が挙げた意見もとい願望を受け流してくれた。俺はまだ諦められなかった。

「お願いします。とても寒いんです。もう凍えてどうしようも出来ません」

肩を震わせて俺は言う。実際のところ、これはあながち嘘ではない。体左半分は、外から来る冷気に当てられ見事に冷え切っていた。三原先生が何かを言おうとした瞬間、後ろから透き通った声が聞こえた。

「先生。本人もそう言っているので、私が彼を保健室に連れて行

きます」

言うと、彼女は席を立ちあがる。

「そうか、すまないがその馬鹿を連れて行ってやってくれ」と三原先生は溜息交じりに彼女によろしくと言葉を送る。

俺は上げた手を握られ無理やり立たされた。そして強制的に教卓の横にあるドアまで連れて行かれる。

言わずと知れた坂本月だ。

俺の手首を力強く握る彼女の手は暖かった。

けれどそれだけであって、今は全くとして関係のない事。

そのまま俺達は教室を後にした。

教室を後にして、俺達は保健室を目指して廊下を歩いていた。月から握られた右手は今も放されてはいない。

俺は教室を出て初めて口を開いた。

「おい月。お前本気で保健室に行くつもりなのか？」

それはどうでもいい質問だった。

月はというと、振り向きもしないで質問に答えた。

「何を言っているの、小嶺君。早く行かないと風邪を引いてしま
うわ」

どうやら月は今の状態を楽しんでいるようだ。それを証明するかのように、二人きりなのにも関わらず猫を被っている。

そんな月に合わせるように、俺もその遊びに付き合ってやる事にする。

「そうだったな。これはすまん。変な事を聞いてしまったな」

「何を馬鹿な事を言っているの？いいから早く歩きなさい。アナタが事を起こすのが遅いから、後十分程度の時間しか私達には残されていないのよ」

握っていた手を急に放すと、月は歩くスピードを上げた。何だか損な気分を味わってしまったような苦い思いが心の中で渦巻く。というよりもまた月にしてやられてしまった。こいつにとって、俺が

あの行動をとる事を見通しての事だったのだ。だからといって、あれが嫌がらせではなかったとは俺は考えられない。嫌がらせも含めて、あれはこの為の口実にすぎないのだろうと一人納得をする。

この学校の保健室は、東校舎の一階にある。

俺と月の教室がある二階からはそう遠くはない。

廊下の突き当たりの階段を下りて直ぐに保健室が目に入った。

俺は進んで保健室のスライドのドアに手を掛けて開こうとしたが、ドアは一ミリも動こうとはしなかった。

どうやら保健の先生は不在らしい。

顔だけ振り向いて月に目で訴える。

月は無言で俺の隣に足を運ばせると、徐にブレザーのポケットから一つの鍵を取り出しドアの鍵穴に差し込んだ。

まさかな、と思ったが、そのまさかだったとは分かり切っていた事だからそれ以上は深く考えないようにした。

ガチャリと、音の後に鍵を抜くと、さっきまで密室を作っていたドアが事無くあっさりと開けられた。

そこで一言月は「さ、入りましょう」と先陣をきって中に足を踏み入れる。

俺も何も言わず中に入りドアを閉める。

室内は思いの外暖かった。

これが、さっきまで此処に保健室の先生が居たのだという推測が出来る。

ちようどすれ違いだったのだろう。

月は真っ先に部屋の隅に設けられた資料棚に向かうと、何の躊躇いもなく両開きの扉を開ける。

何というか、毎回こいつの行動力には驚かされるものがある。

何所からその行動に行きつく感情を引きだしているのかは分からないが、十中八九、思いつきがその原動力となっているのだろう。

俺は資料棚の反対側に不自然に置かれたパイプ椅子に背もたれを

胸に跨る。

そして月の行動を観察する事にした。

棚の中に不規則に並べられた資料の中から五冊ほど取り出すと、一冊一冊を丹念に読みあげる。

何を知りたいのかは分からないが、多分、尚江皓に関する事だろう。

尚江皓　完璧な人間、出来過ぎた人間と呼ばれる実際のところの先輩。

親友想いで、とても優しい良き先輩。

……けれど、あの時の彼女は可笑しかった。

月から言われた一言『親友と呼ぶ彼女は　今何処に居るのでしようか』を聞いた時の彼女の微かな反応を、俺は見逃さなかった。

微かに頬を引きつらせたその瞬間を、俺は確かに目にした。

そして、そこから生じる違和感という言葉も、確かに俺の中には生まれた。

それは小さな歪み。

違和感という名の歪み。

「　あつたわ」

その言葉をキツカケに俺は椅子から下りる。

近づいて、月がそのか細い腕で抱えるように持った資料を覗いてみる。

月の周りには幾つもの資料が乱読したかのように散らばっていた。

「これは……生徒調査だな」

月が手にしていた資料には、この学校　『私立呈陽学園の生徒調査資料』と書かれていた。

書いてあって、今開かれているページの冒頭には見覚えのない名前が書かれてあった。

しかし俺はこの名前を知っていた。

おりはらいおり
「折原伊織」

月は静かに、けれどはつきりと彼女の名前を口にした。

「少し不安だったのだけれど……うん。やっぱり思っていた通りだったわ」

資料に目を離さずに、月は言葉を続ける。

「この生徒。折原伊織は、かれこれ二週間程前から学校に来ていないわ」

「学校に来ていない？」

俺は中腰になって散らかった資料を片付けながら聞く。

「そう。これによると彼女は具合が悪いという理由で学校側に連絡をしたのが二週間前の出来事。それから今日も含めた日にちを休んでいるの。ね、何だか意味ありげな情報だとは思わない？」

「そっか？俺は別に何も思わないけどな。ただ体調が悪いだけであつて、今でもそれが続いているとしか……」

俺は言葉を濁す。

それに気づいた月は、次の言葉を言うのは早かった。

「今朝の尚江皓女子のあの反応を見たでしょ？これは少なからず彼女が関わっているという何よりもの可能性よ」

「そのぐらい考えなさい」と後に付け加える。

俺は何も言えなかった。

だってそれは……。

「折原伊織の件に、尚江皓から何らかの関与があつた　とアナタは思っているのでしょうか？」

俺の考えを月は代わりに代弁し肯定させた。

持っていた資料をパツと閉じると、立ちあがり本のある場所に戻す。俺も後に続くように重ねた資料を押し入れる。

棚の扉を閉め、やっと月は俺の方へ向きかえった。

今の彼女の顔は、酷く楽しそうな表情をしていた。

楽しい玩具を与えられた子供のような、そんな無邪気な笑みを。

「それじゃー小嶺君。今日の放課後尚江皓女子を捕まえるとしましよう」

何気に言ったそれは冗談半分とは違い、そのままの意味なのだろう。

深く溜息を吐いた。

これから先の展開が全く予想できないと、嘆くように。

ただ俺は深く深く溜息を吐いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9786o/>

坂本

2010年11月21日16時11分発行